

弘前藩洋学の祖 佐々木元俊 さ さ き げん し ゆん

弘前藩の最後の殿様十二代藩主となった津軽承昭つぐみあきらの伝記に、『津軽承昭公伝』がある。その文久元年の項に、

九月晦日みそか、医師佐々木元俊ヲ蘭学士トス、蓋けだし、領内ニ洋学士アルハ之ヲ始トスこれ。

という一文がある。

一八六一年（文久元）九月三十日、医師の佐々木元俊を、蘭学つまりオランダ語による学問を教える教授にする。これが弘前藩では、西洋の学問を教える教授のはじめである、というのである。今からおよそ四十年前のことで、この後十年足らずして、日本は明治維新を迎える。

それまで弘前藩が、蘭学と全く関係がなかったということではない。佐々木元俊が蘭学士になる百数十年前の元禄時代に、佐々木宗寿そうじゆという医師が、新たに弘前藩の藩医となった。宗寿は、長崎に遊学して栗崎宗佐の門弟となり、十七年間修業をつづけて、師からその奥義おうぎのすべてを伝えられ、江戸に帰って浅草で開業した。一六九四年（元禄七）、四代藩主信政のぶまさの時に、江戸で弘前藩に召しかかえられ、一六九七

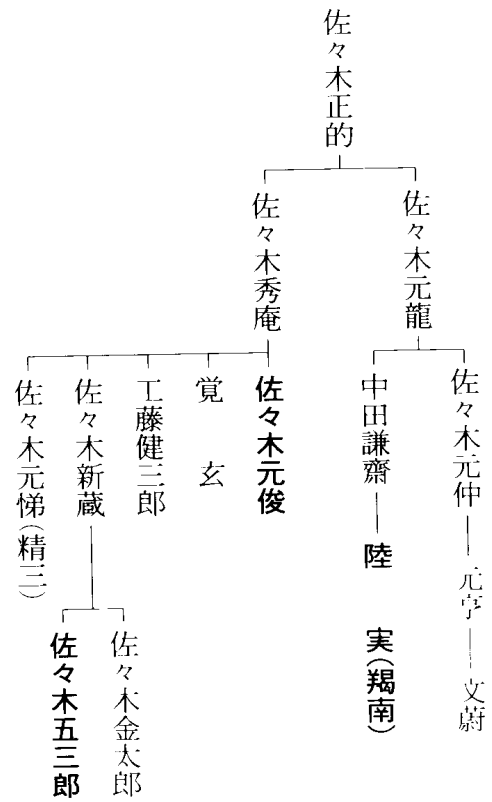
年(元禄十)国表に勤務がえとなつて、それ以後、弘前に居住することになる。この宗寿が、西洋流の医学を学んだ外科医で、その子孫も代々、弘前藩の外科医として勤めた。宗寿は、弘前藩蘭学の先駆者ともいえるだろう。この宗寿が、佐々木元俊一族の祖先であるという説もある。

宗寿が在世のころから数十年過ぎて、日本の「蘭学の事始め」といわれる『解体新書』の翻訳と、その刊行がある。一七七四年(安永三)のことである。この本の翻訳に携わった一人に、「弘前の医官桐山正哲きりやましやうてつ」(「人物志ダイジェスト版」に掲載)がいて、日本の医学史、蘭学史に不朽の名をとどめることになる。

この正哲は、桐山家の四代目で、弘前藩の江戸藩邸に詰める医師であった。一七八八年(天明八)近習医となり、一七九七年(寛政九)江戸の上屋敷に弘道館が設立された時、最初に医学を講義した人である。正哲は、蘭方医・蘭学者として、江戸でも名の聞こえた人で、弘前藩で、全国的に名の知られたはじめての蘭方医であった。

桐山正哲は、一八一五年(文化十二)に亡くなるが(生年については不明)、その三年後に、弘前藩の蘭学の始祖といわれる佐々木元俊が生まれる。

元俊を含む佐々木一族には、優れた人物が多く、『中学生のための弘前人物志』に掲載された人もいるので、次に元俊を中心にした佐々木家の略系図を示すことにする。



ゴシックの陸羯南と佐々木五三郎が
「中学生のための弘前人物志」に掲載

佐々木家は、代々弘前藩の医師であった。正的の長男元龍は、江戸にも学び父の跡を継いで藩医となった。元龍の子元仲、その子元亨、元亨の子文蔚と医者が続いた。特に文蔚は、東京大学医学部を卒業したこの地方最初の医学士であった。後に海軍軍医学校の教官に迎えられたが、一八九二年（明治二十五）乗艦の事故で殉職する。年四十一歳の前途のある身であった。

元龍の弟秀庵は、町医者として亀甲町で開業した。元俊は、秀庵の長男として、一八一八年（文政元）十一月八日、そこで生まれた。元

俊のあと、四人の弟たちが生まれる。父秀庵の医業はあまり振るわず、母が機織はたおりなどとして家計を助け、五人の男の子を苦勞して養育した。豊かとはいえない家庭の中で、たくましく育った子供たちは、やがて、それぞれ自分の道を進みながら、兄弟のきずなをつよく保って、変革する社会の中を、生き抜くことになる。元俊が、後に貧しい人からは料金もとらずに種痘しゅとうして、「医は仁術」を実践したのも、その心は、この幼少時代に培われたものであろう。

元俊は、長子として父の仕事を早くから助けてその医術を学び、さらに持ち前の探求心で工夫・研究を重ねて、その道を深めて行った。やがて医院が土手町に移ってからは、治療を受ける人も多くなり、その収入が、藩の医者をしのごほどにもなったという。

しかし、元俊は、現在自分がしている医業に満足し、今の生活に甘んあまじることはできなかった。

元俊は、而立じりつの歳（三十）を一つ越した。その時、すぐの弟覚玄は二十七歳で僧籍にあつた。比叡山延曆寺に学んで、後に大僧都だいそうずの僧階そうかいを授けられ、帰国して、藩主の菩提所ぼだいじよである報恩寺（新寺町）の住職となった。その弟健三郎は、二十三歳になって、工藤家を継いだ。弘前の藩の藩士であつた。三番目の弟新蔵は、十八歳。後に、製紙、製糸、製陶などの事業を起こし、それを近代的に経営して幕末から明治初期の事業家となった。末の弟元悌げんてい（精三）は十三歳で、当時としてはもはや子供ではなかつた。この元悌については後でふれる。

元俊は、弟たちの成人を見とどけて、三十一歳は、蘭学という新たな学問を志すには、遅きに過ぎた年齢と思ひながらも、心中深く期す

るところがあつて、江戸を目指し、弘前を離れた。時に一八四八年、嘉永元年であつた。

江戸に上つた元俊は、杉田成卿せいけいの門に入って学ぶことになる。成卿は、日本の蘭学の祖といわれる杉田玄白げんぱくの孫にあたる蘭方医で、蘭学の大家であつた。

元俊の成卿塾への入門については、当時、弘前藩の江戸屋敷に勤めていた兼松石居かねまつせっきよ（「弘前人物志」三六六ページに掲載）の尽力があつた。

石居は、元俊より八歳年上で、幕府の学問所昌平しやうへい學に学び、昌平こう學の舎長に選ばれたほどの、学識、人物の優れた人で、江戸でも名のしられた儒者であつた。石居は、はやくから蘭学者の杉田成卿とも交遊があり、西洋の事情についても学ぶことがあり、日本国の内外の情勢から洋学の必要を痛感していた。その折、向学心に燃えて、はるばる江戸に來た元俊を知り、その人物を認めて成卿の門に送つたものと思はれる。石居自身もその二年後の一八五〇年（嘉永三）、藩から蘭学の兼修を命ぜられている。石居は、大儒者であるとともに、蘭学を含む洋学の育成に力を發揮した、すぐれた教育者であつた。

江戸で修学中の元俊は、まず学費に苦勞した。それを助けるために、工藤家に養子に入つた弟の健三郎が、自分の少ない給料から月々二人扶持ふち（一人扶持は一日玄米五合）ずつを差し引いて、それを兄元俊に渡してくださるようお願い出て、それが許された。元俊が上京した翌

年のことである。藩は、町医者元俊の蘭学修学に、藩のお金を使うことを認めたのである。元俊も、蘭書を書写して藩に納め、その写料を学費にあてた。

元俊が江戸に上って七年目（一八五四年）、藩は、元俊が上京以来よく刻苦^{こつく}勉強して蘭学に精通したことを称揚^{しょうよう}し、修学中は三人扶持とし、年頭などには藩主にお目にかかることを許した。その頃、元俊は洋式の新しい医学を身につけ、杉田塾を出て、麻布町^{あざぶまち}に一戸を構え、医院を開いていた。

一八五六年（安政三）、元俊は、藩から帰国するよう命ぜられたが、自費で留学することにして江戸にとどまり、蘭学に没頭した。藩も、元俊の精励ぶりを認めて、翌年には前の通り修学中は三人扶持とした。

医師である元俊は、はじめ医学中心の蘭学研修であったが、その力が増すにつれて、研究対象を医学に限らず、舎密学^{せいみ}（化学）、製練学、地学などの分野に広げていった。

一八五七年（安政四）、元俊は、『藩語象胥^{ばんごしやうしよ}』を江戸で刊行した。蘭蘭辞書を訳述したもので、その内容は、専門家（役人・商人・製造業・芸術家など）に必要な外来語小辞典といえるもので、初学者には使いこなせない上級のものであるという。元俊四十歳の時のことで、江戸に来てまだ十年に満たない時のすばらしい業績で、元俊の語学の才能と一途な努力のさまが推察できる。この書が、元俊の蘭学者としての地

位を確かなものとし、幕府にも認められることになる。

近年、元俊の自筆稿本『地学全書』の一部が、東奥義塾図書館にあることがわかった。『地学全書』は、前、中、後編からなる全体としては十数巻の大部のものらしいが、発見されたのはそのうちの二巻だけである。その本の原本、原著者名は不明であるが、近代的地学の体系を背景に、学問的水準のきわめて高いものであるという。元俊の江戸滞在中に訳述はおえたが、出版にいたらず、そのまま持ち帰り、稽古館蘭学堂の教本に用いたものであろう。

そのほか、『練鉄訓象』(三〇冊)、『厚生舍密』(一〇冊)、『練鉄全編』などの訳書が、元俊にあったと伝えられている。

一八五九年(安政六)、弘前藩最後の藩主(十二代)となった津軽承昭は、藩主になると直ちに、藩学問所稽古館内に蘭学堂を新しく設けて、国元で蘭学を興す道をひらいた。しかし、蘭学の教授者を得ることができず、元俊が弘前に帰るまで、蘭学堂での講義は始まらなかった。

その年、藩は、元俊を七人扶持に格上げした上、三人扶持の手当を与え、さらに小普請医こぶしんいに新規に召しかかえるという厚いもてなしをした。

一方、幕府は、洋書の翻訳や教授をする番書調所ばんしよじょうべしよに物産局を増置して、そこに元俊を出勤させるよう弘前藩に再三にわたって、つよく要請してきた。元俊のすぐれた語学力に加えて、自然科学等の広い学識に、幕府は目をつけたのであろう。

藩は、幕府の要請を断って、元俊を国元へ帰すことにした。元俊が上京して十四年、蘭学の究むべきことは大概きわめた。それに、師の

杉田成卿は二年前に亡くなり、元俊の最もよき理解者である兼松石居もすでに弘前に去った。元俊も弘前に帰ることにした。江戸で迎えた妻まさ子を伴って、一八六一年（文久元）の秋風が立ちはじめると、元俊は江戸を立った。

日数を重ねて、九月二十七日、元俊は弘前に着いた。それを待っていた藩は、三日後の三十日に、冒頭に掲げたように「蘭学士」の辞令をだしたのである。

帰国した元俊は、休む間もなく稽古館に出て、蘭学の教授に当たった。稽古館の蘭学堂は、二年前に設けられて準備はできていた。元俊の教えたものは、和蘭語オランダや医学はもちろん化学、地学、砲術など自分が修めた蘭学のすべてであった。

元俊は蘭学堂での教授のかたわら、私邸でも町民の子弟などを教育していた。その子弟の中には、元俊から学んで西洋の筆算を、早速自分の寺子屋で教える人も現われた。明治維新になる二、三年前の話である。

蘭学堂での講義が軌道きどうに乗って、教師陣も強化されていった。元俊が帰国した翌年には、工藤岩司が弘前に帰り、蘭学堂の教授（「二教」）となって、元俊に協力した。工藤は、かつて蘭学のため江戸に上った時、先に上京していた同じ道の先輩、元俊の世話になった一人である。

しかし、工藤の弘前滞在は長くなかった。工藤は、はじめ蘭学を修めたが、後、英学（英語による学問）に転じていたので、その英学を生

かす道を選んで横浜に行き、通訳などをしたという。

元俊の末の弟、元悌（精三）も兄を助けた。元悌は、一八五五年（安政二）前後に、兄元俊を頼って上京した。元俊は、自分の師杉田成卿の義弟で、杉田玄白の家を継いだ杉田玄端げんたんに、弟元悌を託して蘭学を学ばせた。帰国していた元悌も蘭学堂てんくの教師（「典句」）となった。

その後、元悌は再び江戸に学び、帰って弘前で医者になった。元俊に子がなかったので、元悌がその跡目をついだ。しかし、元悌にも子がなかったため、元悌のすぐ上の兄新蔵の子金太郎を養子にした。元俊の死後、元悌は、弘前を離れ（一八七九年）、田名部（現むつ市）に移住した。

元俊が直接育成した弟子で、後、蘭学堂で教えた人に、小山内元洋げんよう（健けん）がいる。元洋は、元俊にその学才を認められ、元俊の自宅に寄宿して指導を受けた。元洋数え年十七歳の時、元俊は学費を出して元洋を上京させ、杉田玄端の門に学ばせた。蘭学を修めて弘前に帰った元洋は、一八六八年（明治元）数え年二十一歳で蘭学教授手伝となった。その後、元洋は再び玄端に師事して外科と眼科を修め、後に、大医学東校（後の東京大学医学部）の教授となった。さらに軍医となって東京陸軍病院長、広島陸軍病院長を歴任して、広島で三十六歳の短い生涯を終えた。元洋の長男、小山内薫かおるは、日本の新劇運動の指導者として著名である。

少年小説で有名な佐藤紅緑こうろく（本誌二〇二頁参照）の父、佐藤弥六やろくも若い時、元俊に直接蘭学を学んだ。後、藩から選ばれて江戸に上り、

海軍術を修業する一方、福沢諭吉の塾に入って、蘭学から転じて英学を修めた。日本の洋学は、蘭学から英学に移っていたのである。弘前に帰った弥六は、商人となって、この地方の産業、文化のあり方を啓蒙し、実践して、すぐれた指導者の役割を果たした。諭吉に学んだ実学の精神を、弥六は地方で生かしたといえよう。

このように、幕末の弘前藩で、蘭学をはじめとした洋学を志した者で、直接間接に、元俊の影響を受けなかった者は、ほとんどなかった。元俊が、弘前藩洋学の祖といわれるゆえんである。

元俊のもう一つの大きな功績は、津軽地方に種痘しゅとうを普及したということである。

津軽地方（青森県下）で最初の種痘は、秋田の医師板垣利斎による木造町での三十人であるという。時に一八五二年（嘉永五）、ジェンナーが天然痘てんねんとう（津軽では疱瘡ほうそうと呼ばれた）の予防に種痘法を発見した一七九六年（寛政八）から五十年余り後のことである。

板垣医師の種痘から半年遅れて、同じ年の暮れ、弘前藩の藩医唐牛昌運かうじしやううんが、自分の子女ら十名に種痘を試みて成功した。昌運は、元俊より十年ほど前に江戸に上り、同じ師杉田成卿の塾で、牛痘種痘法ぎゅうとうとうなど西洋医学を修得して帰国した同門の先輩である。昌運の弟、唐牛昌考しやうこうもまた上京して、幕府の医師戸塚静海に蘭医学、牛痘種痘法を学んで帰国し、兄昌運と共に種痘の普及に力を注いだ。

しかし、当時は、疱瘡が流行すると、藩が寺院などに安全祈禱きとうさせ、士民に参詣さんげいを命じ、守り札ふだを毎戸にくばる時代である。種痘による予防などという西洋医学の知識は、一般士民にはなく、加えて「種痘すれば牛になる」などの迷信が根づよく、人々の理解協力は得られなかった。また、種痘法の未熟さもあって、藩の積極的援助もないため、唐牛兄弟の熱心な尽力にもかかわらず、種痘を広くゆきわたらせることはできなかった。

元俊は、蘭学堂と私塾で、蘭学の教授に努めるとともに、藩に対して、種痘の必要性とその施設の建設をつよく進言した。藩も、ようやく種痘に積極的となり、元俊の帰国した翌年の一八六二年（文久二）三月には、藩の医学館の中に種痘館を創設した。元俊はその主任となり、定められた日に五人の医生と種痘に当たった。

元俊は、自宅においても日を決めて、貧しい人には代金もとらずに種痘を行った。そして、親身じゆんじゆんになって諄々じゆんじゆんと種痘の理を説き、その効を話して啓発していった。やがて、世の人たちもわかるようになり、元俊の自宅に来て、種痘を頼む者がだんだん多くなってきた。そのため、台所や茶の間まで希望者があふれ、妻のまさ子も、針をとって夫の元俊を助けることがあるほどになった。元俊が明治初年までに、自ら種痘した人は、二万人をこえたという。

元俊の献身的な努力によって、種痘は、弘前藩全領内に及んだ。元俊は、外の医師にも種痘の方法を伝えて、疱瘡の流行に対処した。こう

して、天然痘（疱瘡）という、その頃最も恐れられていた流行病から、多くの人を救った。元俊が、種痘普及の恩人といわれるゆえんである。

このほか、元俊が蘭学で学んだ科学、特に地学や化学を実地にいかしたことも、この時代として特記すべきことである。弘前の南の郊外久渡寺にマンガンを発見したこと、今の岩木町三本柳で、カルキ（さらし粉）の製造業を興し、黒石で、消石灰をとるために貝灰焼（貝殻を焼くこと）の方法を実験したことなどが、それである。

王政復古で揺れた奥羽の戦争（一八六八年）には、元俊も軍医として従軍することになっていたが、火薬に精通し、砲術にくわしい元俊は、国元で火薬などの製造の指導に当たることになった。藩主の下屋敷である九十九森（現在の弘前女子厚生学院校地）に製練所がつくられ、そこで火薬や硫酸が製造された。翌年、この屋敷は藩から払い下げられて、元俊の所有地となった。

明治の世になって三年目（一八七〇年）、元俊は、本町にある自宅（現在の弘前地区消防事務組合消防本部の敷地）に、薬やその材料を売る店を開いた。四年後の一八七四年（明治七）、元俊は、大工今常吉に依頼して、西洋風の二階建の家屋を建築する。それが、弘前では最初の「西洋造り」であるという。後にその建物は、他人の所有となって南隣りに移され、補修・改築されたが、今はもうない。消防本部の南隣り、中村ソフトプラントKKの建物がそれであったが、消防本部の新築により撤去され、今はその面影をしのぶことができない。

洋風の自宅が新築して間もない、その年の瀬の十二月十六日、元俊は、五十七歳の生涯を閉じた。遺骨は遺言により、景勝の地、そして最後の奉公となった製練所のあった九十九森に葬られた。

二十年後の一八九四年（明治二十七）、その地に墓碑が建てられた。表には、明治の元勳勝海舟の筆になる「香遠先生こうえん佐々木元俊墓」が刻まれた。香遠は元俊の雅号である。裏には、元俊の従兄弟いとこの子で明治の言論界の雄、陸羯南くがかつなんの文による墓誌が記された。この墓は、一九〇八年（明治四十一）陸軍偕行社が建設されることになって、佐々木家代々の菩提寺ぼだいじである宝泉院ほうせんいん（西茂森町）に移され、今は一族の墓と並んで建っている。

この墓から大きな声で呼ばばこた応えるほどの場所（長勝寺）に、元俊と同時代の、元俊を最もよく知っていた兼松石居の墓碑がある。

参考文献

竹内運平 『佐々木元俊先生』 一九四三年（昭和十八） 大日本同志会青森県支部
山本博・宮城一男 『佐々木元俊「地学全書」の研究』 一九七七年（昭和五十二） 弘前大学教養部

出典…弘前人物志編集委員会編『中学生のための弘前人物志平成十五年度版』二〇〇三年（平成十五年）弘前市教育委員会、一・一三頁